

解答

- 一 問一 a 田植え b 田植機での移植 問二 田植機である
問三 花が咲いた 問四 労働時間の節約・生産性の向上 問五 イ
問六 イ 問七 歌・会話・余裕 問八 ウ 問九 エ
問十 米は人間の力によってできるのではなく、天地（自然）からのめぐみであるという農業観を日本人が持っていた「から」。
問十一 自分の利益を独占的に求めたり、効率性や生産性を求めたりするのではなく、楽しさや天地のめぐみを他の人々と分かち合うようにするもの。
問十二 1 水 2 手 3 実
二 問一 エ 問二 ウ 問三 店服を着ないで店番をすることを認めること。
問四 ア 問五 ウ
問六 自分の気持ちを表す正確な言葉を見つけた「から」 問七 ア
問八 一方では店番も店服を着るのもいやだと思いがちでも、他方では生活を支えるために店番をしなければならないとわかっていて、どっちつかずの居心地の悪い思い。
三
問一 パイプオルガン 問二 いわば 問三 人間のような名前をつけていること。
問四 エ 問五 国内と国外 問六 イ
問七 筆者がイタリア留学中に、アーレント作のパイプオルガンを弾いていたという経験があったから。
問八 アントニオを引きこなす力が不足していること。 問九 エ
問十 カザルスホールを残し、今まで通り弾かれ続けること。 問十一 ウ 問十二 イ
問十三 ア ○ イ ○ ウ × エ ×
四
1 生誕 2 難破 3 拝〔む〕 4 習性 5 垂〔れ〕

解説

一 出典は、宇根豊「農は過去と未来をつなぐ 田んぼから考えたこと」。

田植えや稲刈りという手仕事は、田植機やコンバインによって機械化され、田んぼでの作業風景は大きく変化した。筆者は仕事と技術のちがいを、事実に基づき独自の視点から展開している。

問一 次の段落の「田植機で苗を移植する技術は、田植えという百姓仕事の発展したもの」という表現に着目しよう。

問二 直前の文に、「田植機で苗を移植する技術は、田植えという百姓仕事の発展したものである」とあります。

問三 多くの百姓のおばあさんが田植えが楽しかった理由として、「田植えをしながら話」が盛り上がり、ごちそうも用意されていた」ことを挙げています。ここでは、「話が弾み、話題が次から次へと出て、話が活気付く」という意味の、「花が咲く」という慣用表現があてはまりますね。

問四 「農業の近代化」の例として、「田植機の出現など」があげられていますが、田植機が開発された目的については、4段落に「ために」という表現を用いて、目的が二つ書かれていますね。

問五 少年・青年時代、筆者は「近代化によって失っていく世界の豊かさが身にしみるから」、どのような感情を持ったのでしょうか。農業の近代化によって良くなったことばかりを言われることに、筆者は否定的な感情を持っていますね。従って、「イ 反発」が入ります。

問六 「天秤にかける」とは、「二つのものの優劣や軽重、利害得失などを比較する」という意味です。筆者はこの文章で、近代化以前の「仕事」の精神と、近代において「仕事」が「技術」化で失ったものの大きさを、強い調子で述べています。難問です。

問七 4段落に、田植機での移植で、「歌や会話」がなくなったことが書かれています。直後に「習慣」とありますが具体的にありません。4段落に「早乙女が植えるほうが稲はよく育つのだ」という習慣」5段落に「稲刈りのあとに、年寄りたちが温泉に泊まりがけで何日も出かけていた習慣」とあります。このような、近代的な効率化と正反対のあり方は、仕事の中に「余裕」があることから生まれます。3つめは難問です。

問八 2段落に書かれている、天地からの恵みである米を百姓だけが独占的に受け取るのではなく、貧しい人と分かち合うという考え方に、「日本と西洋が離れていても、百姓という仕事の共通性」を見出し、筆者は「胸があつく」なっているのですね。

問九 「しきたり」とは、「昔からの習慣、ならわし」です。直後のお年寄りの百姓夫婦の回答に、落ち穂ひろいをするのは、百姓ではないことが書かれています。百姓は、貧しい人と、天の恵みの米を分かち合っているのですね。

問十 直前直後に着目しましょう。百姓は「つくる」と言わずに「とれる」「できる」と言ったのは、「かつては、米は天地（自然）のめぐみだというのが日本人の農業観」だったからです。

問十一 直前の二段落に、かつての「日本人の農業（＝百姓という仕事）観」が書かれています。この段落の内容をまとめましょう。

問十二 「我田引水」＝「自分の田にだけ水を引く意から」自分に都合のよいように説明したり、物事を運んだりすること。「濡れ手で粟」＝「濡れた手で粟をつかむと粟粒がたぐさぐさくっついてくるところから」労せず多くの利益をあげることのたとえ。「実るほど頭の下がる稲穂かな」稲の穂は実が入ると重くなって垂れ下がってくる。学徳が深まる、かえって他人に対し謙虚になることのたとえ。

二 出典は、ねじめ正一「ぼくらの言葉塾」。

言葉による表現をする場合、正直な言葉と正確な言葉が混同されがちであるが、筆者は自分の体験を通して本質をぎゅつと鷲掴みにする正確な表現について説明している。

問二 直後の「住み込みの店員さんに対して私を特別扱いにしないという意味もあった」から、店員さんへの遠慮というのがわかりますね。

問三 店番をするときは店服を着るのが普通ですから、特別とは店番をするときに店服を着ないことです。「特別扱い」とは、普通ではないことを認めることです。

問四 直後に「気持ちとしてはどんどん沈んでいきます」とありますから、明るく晴れやかな雰囲気ではなく、重苦しく地味な雰囲気ですね。また、「グレー」とは、灰色のことであり、「くすんだ」とは、「黒っぽく、地味である、冴えない色である」という意味です。

問五 「かねる（兼ねる）」とは、「しようとしてできない、…することがむずかしい」という意味です。

問六 二段落後に「宙ぶらりんでなくなった」という表現がありますね。「私は自分の気持ちを表す正確な言葉を見つけたので、イライラした気持ちがスッと落ち着いたのです」と書かれています。

問七 店番は、「一番大切な暮らし」であり、店服を着ることで暮らしは成り立っているのですから、店番は暮らしそのものであり、家の大事な収入源になっているのです。

問八 店番をしないと生活をしていくことができないとわかっていながらも店番や店服がイヤだという思いの、どっちつかずの居心地の悪い思いですね。

三 出典は、水野均「呼吸するパイプオルガン」（日本経済新聞2010年2月18日）。

カザルスホール専属のオルガン奏者である筆者は、キャンパス再開発計画のために使用停止になる、アーレント作のパイプオルガン「アントニオ」の今後を憂い、「アントニオ」に対する思いを記している。

問一 五字以上という条件があるので、「オルガン」では足りません。

問二 3段落に筆者とオルガンとのつき合いが書かれています。2文目がより具体的です。

問三 筆者はカザルスホールのオルガンに、「アントニオ」と人間のような名前をつけています。

問四 各地のホールで演奏するオルガン奏者と各地のオルガンとの出会いは、まさに「一生に一度かぎり」かもしれません。

問五 直後に「世界のオルガニストのあこがれの楽器」とあり、ここでは「国内と国外」の意味です。

問六 「過言ではない」とは、「言い過ぎではない」という意味です。

問七 カザルスホールのオルガンも、筆者が留学中に弾いていたアーレント作のオルガンなのです。

問八 直後の文に「奏者に腕がなければ引きこなせない」「オルガンに育てられた」と書かれており、「アントニオを弾きこなす実力がない」ということですね。

問九 カザルスホールは、97年が開館10周年であり、またこの文章が書かれたのは2010年です。

問十 「パイプオルガンはワインと同じで熟成に時間がかかり、ホールと対で一つの楽器」であり、「簡単に『引越しまし』できるものではない」ありません。

問十一 「この上なく、非常に」の意味であり、「途中でたち切る、関係が切れる」の意味ではありません。

問十二 「アントニオ」を備えたカザルスホールの取り壊しを中止させるためにオルガン奏者である筆者にできる第一のことは、素晴らしい演奏で「アントニオ」の価値を世間に知らせることなのです。

問十三 ア、盛岡市の某ホールのオルガンは「ジョバンニ」と呼ばれ、「ぐっと素朴で優しい友人だ」とあります。イ、「教会や大ホールではなく室内楽向けのコンサートホールにある例は極めて珍しい」とあります。ウ、「アントニオ」ではなく、他のアーレント作のオルガンです。エ、オルガンの音色は、ホールの大きさによって決まるとは書かれていません。